

その日の夜。

父がお礼を兼ねての食事会にルルを誘ったのが、先ほどのこと。

自室に戻った俺は、思い立ったようにまた部屋を出た。

向かう先はルルの部屋だ。

ノックをすると、彼女が顔をのぞかせる。

「ツバメ……、どうしたの？」

「よかったら、うちの薬草園を見ていかない？」

今の俺を形作る場所を、ルルに見てほしいと思った。

「いいの？」

「もちろん。あ、冬だから虫はそんなにいないと思うよ」

「……それは、ありがたいわね」

ルルは肩をすくめた。

そして、ふたりで薬草園へ向かう。

「ここだよ」

「想像していたよりも、うんと大きいわね……」

たしかにうちの薬草園は、ほかの薬屋とは比べ物にならないほどの広さだ。

「好きに見て回っていいよ。許可はもらってるから」

「ありがとう……これ、見たことがない薬草だわ」

「ああ、これはね——」

記憶をなぞりながら説明していく。

今の俺の姿は、まるで、あの日の庭師のようで。

植物は嘘をつかない。

だから、庭師も嘘はつけない。
ルルを騙して、傷つけた俺だけど。

「……ルル」

「なに？」

「今までのこと、本当に——」

「待って。その先に続く言葉が『ごめん』だったら聞かないわよ」

凶星だった。

むっとした表情のルルに、開きかけた口はそのまま閉じていく。

「当たり前」

そんな俺に、ルルは笑った。

細められた瞳に、長いまつ毛がよく見える。

それに陰^{かげ}る青い瞳は、いつでも前を向いていて。

そのまなざしに——どうしようもなく惹^ひきつけられて。

植物の前では正直でいられる。

だから、どうか——届いてほしい。

「俺——ルルが、好きだ」

◇

その言葉を聞いた瞬間、頬に熱を感じた。

聞き間違い？けれど、ツバメはまっすぐにこちらを向いている。

「傷つけたぶん……ううん、それ以上に、ルルを想うから。傍^{そば}に、
いさせて」

彼の瞳には私だけが映っている。
それがどれほどうれしいことなのか、心の底で思い知る。

「私……」

「うん」

傍にいたいと、願うのは——。

「私も、そう願ってる」

「ルル……」

心臓が^{はやがね}早鐘を打つ。

指先が震えるから、自分のスカートを握りしめた。

「傍にいて、ほしい。——ツバメのことが、好きだから」

風が髪をさらっていく。

葉が擦れ合う音が、まるでささやきのように聞こえてくる。

互いの視線が交差して、恥ずかしさからそらせば、手を握られた。

「ありがとう、ルル」

「こちらこそ。気持ちを伝えてくれたこと、私と向き合ってくれたこと。とても……うれしく思うわ」

握られた手はあたたかい。

彼を見ると、柔らかな笑みがそこにあった。

ふたつの影は、月に照らされて、広い薬草園に伸びていく。



うららかな春の陽気が、大都市イルムに降り注ぐ。

あちらこちらに春の花が咲き誇り、街はいつそうにぎやかだった。

「ねえ、本当に行くの？」

「嫌になっちゃった？」

「そうじゃ、ないけど……」

「お礼を言われるだけだよ、あと食事かな？」

「それが一番緊張するのよ！」

春先、俺の母からルルに手紙が届いた。

改めて感謝を伝えるために、家に招待したいという内容だった。

「珍しいね、ルルがそんなに緊張するなんて」

「だって、ツバメのご両親に会うのよ！　しっかりしなくちゃ…
…」

「俺はうれしいよ。ルルを紹介できるから」

「紹介って……」

「俺の恋人だよって」

顔を真っ赤にしている彼女の手を取って、隣に並んだ。

そんな俺たちを、花々が静かに見つめていた。

エンディング H 【春風に揺れる髪】